

次の文章をよく読んで、7ページから8ページにある問いに答えなさい。

わたしたちが生活している日本は、時間に対してとてもうるさい社会といわれています。学校で、時間を守ることを先生にきついわれた経験はありませんか。時計をにらみながら、あわてて家を出て行くおとうさんやおかあさんの姿を見たことがきっとあるでしょう。わたしたちが、このように時間を気にしながら生活し始めたのは、いつごろからなのでしょう。これから「時間」と関わり^{かか}の深い問題を例にあげて見ていくことにしましょう。

<鉄道と時間>

鉄道と時間とは、切っても切れない関係にあります。全国で毎日時間どおりに列車が動いていることを考えると、列車を動かしている人たちが実は大変なことをしていると想像できるでしょう。ここまで正確に列車を運行する国は、世界でもめずらしいのです。

2004（平成16）年、新幹線が生まれてちょうど40年がたちました。開通は1964（昭和39）年、（①）の開催される直前のことでした。その後、新幹線はつぎつぎに改良され、現在では東京と新大阪の間を3時間以内で走ることが可能になっています。東京と新大阪の間を走る新幹線は東海道新幹線といいますが、鉄道がなかったころ、人びとは歩いて旅をしました。当時、江戸（東京）から東海道を^いって伊勢神宮^{もつ}に詣でる旅が人びとの間で流行しました。それを題材に旅の様子をおもしろおかしく書いた『東海道中膝栗毛』という書物を見ると、江戸から大坂（大阪）への旅に約1か月かかっています。

『東海道中膝栗毛』の出版から100年以上がたち、明治になると日本でも鉄道が開通しました。1872（明治5）年、東京の新橋と（②）の間を走り始めた汽車は新橋を毎時00分に出発し、53分で（②）に到着したのです。片道にかかる時間が53分というのは、徒歩で約10時間、人力車で6～7時間、汽船で3～4時間かかったのに比べて画期的なできごとでした。その後、1889（明治22）年に東海道線が全線開通したころは、新橋から神戸まで20時間かかりましたが、1930（昭和5）年「超特急つばめ」は、東京と大阪の間を10時間以内で結ぶようになりました。

移動時間が短縮され便利になる一方で、人びとには混乱もありました。明治のはじめは、時刻を知る方法が少なかったため、乗りおくれたり、出発まぎわに飛び乗る客が出ました。また、東京の街の中を乗り合い馬車が走るようになると、歩行者が馬車のスピードにあわせられず、

ぶつかって大けがをする人もいました。そのことを、外国人が漫画^{まんが えが}に描いています。スピードという、便利だけれど危ない文明との出会いがそこにあったのでした。

鉄道は産業が発展するにつれて重要になっていきました。イ鉄道が全国にひろがると、決められた時間どおりに列車が動く「定時運行」が本格的になっていきました。

そして、新幹線の登場で、列車の運行は過密になっていき、秒単位で予定が組まれるほどになりました。列車の運行予定を記した表のことを「ダイヤグラム」といいます。「ダイヤグラム」には、列車がどこでとまり、どこですれ違^{ちが}うかということがすべて細かく決められています。ですから、運転手にも秒単位で時間をとらえることが要求されます。新幹線の場合、25秒おくれるだけで、他の列車の運行も、どんどんおくらせてしまうのです。

鉄道が正確に運行されてきたために、なにごとも予定どおりに進むようになりました。しかし、乗客は、列車の時間を気にしなければならなくなりました。例えば旅行に行く場合は、目的地に到着する時間の目安^{めやす}をたてて、時刻表を見て、列車のキップを予約します。旅行中も見学場所の開いている時間を気にしたり、帰りの列車の出発時間を考えて行動しなければなりません。このように、列車の時間は、わたしたちの行動をしぼってしまうことがあります。それでも、より速く、より遠く、そしてより正確に移動できるよう、鉄道は発展していったのです。

<放送と時間>

新聞が世界中の情報をわたしたちのもとに知らせる役割をはたすようになって100年以上たちますが、ラジオやテレビの発達は、それをより速いものにしました。1953（昭和28）年にテレビ放送が始まり、ウ大相撲^{おおずもう}などが放送されましたが、そのころテレビは高価で、各家庭ではとても買えるものではありませんでした。そのため人びとは、繁華街^{はんかがい}にある「街頭テレビ」の前に集まって大ぜいで見ていました。しかも当時は一日の放送時間が5時間から6時間程度で、午前と午後に放送を休む時間帯もあったのです。1960（昭和35）年以後、テレビは急速にひろがり、放送時間も拡大され、わたしたちがテレビを見る時間も増えていきました。今では一つの家庭に複数のテレビがあることもめずらしくはないでしょう。そして2000（平成12）年には、わたしたちがテレビを見る平均時間は、曜日によって異なりますが、3時間半から4時間程度にのびてきています。

テレビの普及^{ふきゅう}によって、わたしたちの生活に変化があらわれています。テレビの番組は7時ちょうどや9時ちょうどなどに始まるので、見たい番組が始まるまでにやっていることを中断

したり、番組が終わってから新しいことを始めたりするようになっていきます。テレビが時計のかわりに使われることも当たり前になりました。朝、わたしたちはニュース番組の画面の片すみにでてくる時刻を、横目で見ながらしたくをすることがあるでしょう。

さらに、テレビ番組が深夜にも放送され、24 時間化するようになりました。夜おそくに見たい番組があって、ねるのがおそくなってしまったという経験はありませんか。工テレビ放送の24 時間化と、わたしたちの睡眠時間が減り、深夜型の生活をする人びとが増えていることとは無関係ではないのです。

<むかしの時間、今の時間>

鉄道もテレビもなかったころは、どのような時間感覚で生活をしていたのでしょうか。

江戸時代まで、時の刻み方は、干支を使っており、才夜明けを卯の刻、日暮れを申の刻と決め、その間を6等分し、夜も6等分していました。この時間にもとづいて、当時の村では、掟が定められていました。ある村では申の刻を過ぎてからの作物の収穫を禁じています。またある村では卯の刻を起床時間、亥の刻を就寝時間とし、この時刻には当番が太鼓を打って知らせて回ったといわれています。このほかにも田に水を引く水門の開閉時間、百姓が共同で利用する山林への出入り時間など、さまざまな掟を定めていました。力(A)の時間という考えはなく、すべてが(B)の時間になっており、さらにそれが(C)の時間にしばられていたのです。

また、江戸では、初めは城内で時計師が時を計って鐘をつき、卯の刻と申の刻を知らせていましたが、そのうち、鐘を鳴らす時が増えていきました。やがて、町中にも鐘つき堂が増えて、江戸時代の終わりころには11か所以上になっていたようです。江戸の町人たちは、自分たちで「町」を運営しており、「町」ごとにもうけられた防犯用の木戸も、鐘つき堂の鐘の音で、開け閉めしていました。こうしてみると、江戸時代には鐘の音をたよりに時間を守る生活は人びとに定着していましたが、決して現在の鉄道やテレビのように分秒単位の時間感覚ではなかったことがわかります。

一方、江戸時代の終わりごろ、西洋ではすでに「定時法」が使われていました。そして、働く時間と給料が約束で定められ、この約束を守ることで社会が動くようになっていきました。すると、各個人にとって、時間は収入と直接関わるものになってきました。また、約束した時間以外は、自分の時間として利用することが可能になっていきました。自分の時間を利用して

旅行に行くなど、さまざまな^{ごらく}娯楽が考え出されていったのです。

西洋式の時間、すなわち分秒単位の時計をもとにした時間が日本人の生活の中に入ってきたのは、文明開化のころでした。すでに、そのころの西洋には、世界のさまざまな国や地域と、船を使って貿易を行う国も現れていました。そのため、いつでも、どこでも、一定の基準にしたがう時間を使って取り引きをすることが必要とされました。これを世界の標準時刻といいます。世界の標準時刻を決める会議が開かれたのは、日本では明治維新^{いしん}のころでした。キこの時、イギリスのロンドンを通る南北の線（^{けいせん}経線）を基準として、^{けいど}経度15度ごとに1時間ずらすことが決まりました。日本の場合、^{とうけい}東経135度が標準時刻の基準となりました。瀬戸内海に面した兵庫^{ひょうご}県の（③）は、その経線が通る都市として有名です。こうして、西洋式の時間は日本に入ってきました。もっとも、初めのうちは、その生活時間に慣れることができませんでしたから、政府は、^{おおやけ}公の場で、西洋式の時間に慣れさせるような教育を行いました。

公の場とはどのようなところでしょうか。例えば、学校があげられます。ク江戸時代には、武士^{はんこう}たちは藩校で、町人や百姓は寺子屋で学んでいました。寺子屋は、辰^{たつ}の刻^{こく}ごろにはじまり、未^みの刻^{こく}ごろに終わるというおおよその決まりはありましたが、時計もなく、その日にやるべき事が終わった子どもから順に帰っていきました。しかし、明治時代になると、「毎日、登校は授業の10分前でなければならない」という規則が定められ、西洋式の時間で学校生活が進められるようになりました。つまり、今の学校のように授業の始まりと終わりが全員同じ時間になったのです。こうして、子どもたちは西洋式の時間に慣らされていきました。

^{おとな}大人たちが西洋式の時間に慣らされた場所は、官営工場や軍隊でした。ケ富岡製糸場^{とみおか}のような官営工場では西洋と同じように、働く時間と給料が約束で定められたので、時間を守ることが求められました。軍隊では兵士たちが共同生活をしながら訓練を受ける中で、規律正しい、分刻みの行動を教えこまれました。

西洋式の時間に慣れるためには、時計が必要となりました。1887（明治20）年ごろまでは、アメリカやスイスから輸入されたものが中心でしたが、しだいに安い国産の柱時計や置き時計が大量に製造・販売^{はんばい}されるようになり、1907（明治40）年には7割以上の家庭にひろがっていきました。一方で腕時計^{うでどけい}や懐中時計^{かいちゅうどけい}は、高価なアクセサリと見られていたことや、和服を着る習慣が続いていたため、日本人全体で見ると、あまりひろがっていませんでした。しかし、成人男子に限ると、1897（明治30）年には10人に1人、明治の終わりまでに4人に1人ぐらいが持つようになっていました。コこのころ、時計^{けいたい}を携帯するようになった職業のひとつ

に軍人があげられます。

こうして、学校や工場、軍隊などの公の場を通して、明治時代から分秒単位の時間感覚がひろがっていきました。ここであげた例を見るだけでも、わたしたちはより細かい単位で時間をとらえるようになったことがわかります。そして、それにつれて、だれもが正確な時間を知ることが必要とされ、ぜんまいで動く機械式時計では不十分となりました。現在、わたしたちが目にする時計の多くは、「クォーツ時計」といって、^{すいしょう しんどう}水晶の振動を利用して動く時計ですが、ぜんまい式に比べて、正確である上に、安くつくることのできる時計です。さらに、より正確で、細かい時を刻む時計がつきつぎに生まれてきています。現在もっとも正確な時計が原子時計という時計です。このサ原子時計から送られた電波をうけて、定期的に誤差を修正する電波時計というものも開発されました。

<生活の変化と時間>

分秒単位の時間感覚が^{いっぽんてき}一般的になると、わたしたちの生活も変わりました。特に、高度経済成長のころの変化は、それまでと比べると、とても大きな変化でした。シそのころに開発され、^{さんしゅ じんぎ}「三種の神器」とよばれた白黒テレビ、^{れいぞうこ}電気冷蔵庫、^{せんたくき}電気洗濯機は、家事にかかる時間を大幅に減らしました。その後、「3C」とよばれたカラーテレビ、クーラー、乗用車が登場し、さらに別の変化をもたらしました。

深夜まで起きているという生活も、このころから増えていきました。やがて、コンビニエンスストアが登場し、全国にひろがって24時間営業を始めるようになりました。すると、深夜に働く人はもちろん、だれでも、いつでも好きな時に買い物をすることができるようになっていきました。

<わたしたちの社会と時間>

分秒単位の時間にしがった社会とは、歴史の中でわたしたち自身がつくりあげてきた社会です。例えば、「時は金なり」という言葉が生まれたように、時間は利益や便利さと直接結びついていると考えられるようになってきたのです。科学技術の進歩によって、わたしたちはさまざまな時間を短縮することに成功してきました。それとともに、時間を効率的に使うことがよいことと考え、生活するようにもなりました。

一方で、時間を効率的に使う社会は、見方を変えると、すべてが時間に追い立てられた社会

でもあるのです。仕事も、遊びも、いまや分秒単位の時間と結びついています。ですから、最近では時間を効率的に使おうとするあまり、大切なものを忘れてはいないか、という疑問も出ているのです。30年ほど前に「せまい日本、そんなに急いでどこへ行く」という交通標語がありました。この言葉はその後も、わたしたちへの警告として使われ続けています。寄り道をしたり、遠回りをするをきらい、なるべくおだな時間を減らそうとして急ぎすぎ、ゆとりをなくしているということに対する反省が、いまではこの言葉にこめられているのではないのでしょうか。そして、「スロー」という英単語を訳すときに、悪い印象が強い「おそい、のろい」でなく、良い印象が強い「ゆっくり」という言葉を使って、よりゆとりのある生活「スローライフ」を提案するような動きも起こっています。

こうした提案が起こるのは、分秒単位の時間感覚の中で「時間に追い立てられずにすむ社会」をとりもどそうとしているからではないでしょうか。もし、分秒単位の時間感覚を拒んで生活すれば、時間に追い立てられずにはすむかもしれません。しかし、それでは社会の流れにさかっていると言われませんか。「時間に追い立てられずにすむ社会」と、「時間を効率的に使う社会」を両立するのは、大変むずかしいことだといえるでしょう。

問1 文中の空らん(①)-(③)にあてはまる、もっとも適当な語を書きなさい。

問2 下線部アについて。東海道を通る旅で、

伊勢神宮へのお参りはとても人気がありましたが、その途中にある大井川は、渡りづらい難所として知られていました。

右の地図上のあ～えから伊勢神宮のある志摩半島を、お～くから大井川を選び、記号で答えなさい。



問3 下線部イについて。鉄道は全国にひろがり、国有化されました。それと同時に「定時運行」が本格的になっていきました。「定時運行」は国にとって、どのような利点があったと考えられますか、答えなさい。

問4 下線部ウについて。相撲では、勝負のはじまりを「立ち合い」といいます。「立ち合い」までに何度も力士が土俵の上に両手をついてはにらみ合うことを「仕切り」といいます。むかしは「立ち合い」までの時間に制限はありませんでした。ラジオ放送が始まった1928(昭和3)年には、幕内力士で10分の制限時間が定められ、1950(昭和25)年からは4分に制限されました。

(1) なぜ、そのような制限が必要になったのでしょうか。その理由を答えなさい。

(2) 制限時間を設ける前は、どのようなときに勝負がはじまったのでしょうか、答えなさい。

問5 下線部エについて。下の表は、1960(昭和35)年から2000(平成12)年まで行われた調査をまとめたものです。これを見ると、わたしたちの睡眠時間は減り、深夜型の生活をする人びとが増えていることがわかります。その原因のひとつはテレビにあります。そのほかにどのような原因が考えられますか。この40年間の産業全体の変化を考えて答えなさい。

	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年
平日の平均睡眠時間(分)	493	477	472	459	443
夜10時に眠っている人の割合(%)	66	44	37	30	23
朝6時に眠っている人の割合(%)	41	56	62	61	62

- 問6 下線部オについて。本文にあるような江戸時代の日本で使われた時の刻み方を「不定時法」といい、わたしたちが現在使っている時の刻み方を「定時法」といいます。定時法と比べて、不定時法の特徴は何でしょうか、答えなさい。
- 問7 下線部カについて。(A)(B)(C)にあてはまる組み合わせとして、適当なものを1つ選び、記号で答えなさい。
- あ 個人一家一村 い 個人一村一家 う 家一村一個人 え 家一個人一村
- 問8 下線部キについて。日本の標準時刻が東経 135 度を基準にしていることから考えると、イギリスと日本との標準時刻の間には、どのような関係がありますか。正しいものを下から1つ選び、記号で答えなさい。
- あ イギリスの方が9時間早い い 日本の方が9時間早い
う イギリスの方が15時間早い え 日本の方が15時間早い
お 標準時刻としては同じ
- 問9 下線部クについて。武士と町人とでは教わる内容が異なります。それぞれ、おもにどのようなことを教わっていたのでしょうか、答えなさい。
- 問10 下線部ケについて。富岡製糸場では、何を原料に、どのような製品を作っていたのでしょうか、答えなさい。
- 問11 下線部コについて。このころ起こった戦争で、軍人は腕時計や懐中時計を必要とするようになりました。軍人が戦争で時計を必要とするようになったおもな理由を答えなさい。
- 問12 下線部サについて。この電波時計と人工衛星を使い、現在の位置を特定できる技術が開発されています。この技術を使った機械を1つ答えなさい。
- 問13 下線部シについて。「三種の神器」は、家事を短い時間で、楽に行い、空いた時間に別のことを行うという生活の変化をもたらしました。「3C」は、「三種の神器」によって変わった生活に、さらに別の変化をもたらしましたが、どのような変化でしょうか、答えなさい。
- 問14 「時間を効率的に使う社会」と「時間に追い立てられずにすむ社会」とを両立することは、なかなかむずかしいことが本文では述べられています。それはなぜだと思いますか。また、その両立はこれからもむずかしいことでしょうか。「分秒単位の時間にしがった社会がいったんできると」に続くように、本文全体をよく読んで、140字以上200字以内で書きなさい。ただし、句読点も1字分とします。

〈問題はここで終わりです〉